厚生労働科学研究費補助金（移植医療基盤整備研究事業）
令和2年度～令和4年度　総合研究報告書
分担研究報告書

社会への啓発活動と社会への教育のあり方に関する研究

研究分担者　朝居　朋子　藤田医科大学保健衛生学部看護学科　准教授
研究協力者　佐藤　　毅　東京学芸大学附属国際中等教育学校　教諭

研究要旨：
知識型教育ではなく、生徒の思考を重視する授業実践として、移植医療を題材にした倫理的ジレンマの授業実践及び教材開発を行った。匿名の原則、募金と渡航移植、臓器売買、親族優先提供、オプトアウト制度をテーマにした授業案を作成した。今後は実際に授業を行い、生徒の反応を調べ、授業案の改訂並びに横展開を検討する必要がある。
初等教育において移植医療を題材にした授業実践を参観した。当事者の体験談や臓器移植に関する基礎知識について学んだあと、双方向かつ参加型の授業が実践されていた。生徒が様々な価値観を知り、課題解決能力につながるような移植医療の教育実践が今後重要であると考えられた。
都道府県移植コーディネーターに対して、新型コロナウイルス感染拡大が業務に与える影響について無記名自記式質問用紙調査を実施した。コロナ禍における院内Coとの関係性の変化は、あっせん時の対応よりも日常的な対応の方が大きかった。研修会開催数の減少、研修のスタイルの変更、コロナ禍による都道府県コーディネーターによる病院訪問の減少などから、今後長期的に見て影響が出ることが考えられた。

A. 研究目的

移植医療を題材した授業は、実際に行われており、2021年度大学入学共通テスト公民の現代社会で臓器移植が出題されたことからも、基礎知識として修得すべきことになったと考える。教科書の内容に沿った知識伝達型の授業の後には、社会における課題を把握し、その解決に向けて自分の考えをまとめ、他者の考えを理解し、そのうえで選択・判断する力、さらに自分の考えの言語化できる力を育む必要がある。

そこで、本研究では、生徒の思考を重視する授業実践を目的に教材開発と実際の授業の実施及び生徒のフィードバック分析を行うことにした。

また、新型コロナウイルス感染拡大の中で院内移植コーディネーター（院内 Co）研修への影響、現状の研修体制等を調査し、今後の院内 Co の研修体制の確保に向けた検討を行った。

B. 研究方法

中高一貫校の保健体育の時間を使い、3年生の117名の生徒に「匿名の原則」を題材にした授業を行った。その後、移植医療の複数のテーマに関して、倫理的ジレンマの教材開発を行った。初等教育での臓器移植を題材にした授業を参与観察した。

都道府県移植コーディネーターに対して、新型コロナウイルス感染拡大が業務に与える影響について無記名自記式質問用紙調査を実施した。

（倫理面への配慮）

授業実践：授業の実施及び生徒からフィードバックを集めることについて当該校の校長の了承を得た。フィードバック内容は匿名性を担保し、分析利用に関しては個々の生徒の了承を得た。

無記名自記式質問用紙調査：回答するか否かは任意で、都道府県臓器移植コーディネーターの評価に関わるものではないこと、データの保管は厳重に行い、目的外使用はせず、終了後データを完全に破棄することを説明した。人情報保護の関係上、質問紙の送付は都道府県臓器移植コーディネーターを管轄する公益社団法人日本臓器移植ネットワーク（JOT）を経由して行った。

C. 研究結果

生徒の思考を重視する授業実践として、今回は臓器移植の中でも倫理的ジレンマの1つである「匿名の原則」を題材にした。生徒のフィードバックより、授業で印象に残ったことについては、「匿名の原則があること」「本当は人の優しさで行われるべき臓器移植にも負の面があること」「臓器移植にストーカーなど社会的な問題、リスクもあり得ること」「サンクスレターが感動的だった」「それぞれの立場に立って考えること」等が挙げられた。学んだことが今後の自分にどう生きると思うかについては、「提供、移植の立場になった時に考えることができる」「身近に臓器移植関連のことが起きたとき慌てないで済む」「正しい知識を持っておくことは大切」「家族と話そうと思う」「意思決定をするきっかけになる」「違う意見

を持つ人に対して、『違う意見を持っている』で終わりでなく、なぜそう考えているのか理由まで知る」「生きるということに感謝をし、毎日を充実させて過ごす」等であった。生徒は過去の学習内容と合わせて考え、自分の意見をまとめ、他者の意見を聞くことで当事者の立場になり、思考をより深めることができた。臓器移植に関する知識伝達の授業だけでなく、倫理的ジレンマを考える授業を実践することの有用性が示唆された。

さらに、臓器移植を題材にした倫理的ジレンマとして、匿名の原則、募金と渡航移植、臓器売買、親族優先提供、オプトアウト制度をテーマにした授業案を作成した。今後は実際に授業を行い、生徒の反応を調べ、授業案の改正並びに横展開を検討する必要がある。また、初等教育において臓器移植を題材にした授業実践を参観した。当事者の体験談や臓器移植に関する基礎知識について学んだあと、双方向かつ参加型の授業が実践されていた。

46 都道府県 61 名に対し、自記式質問紙調査を行い、43 都道府県 53 名から回収した（回収率 87%）。院内 Co 設置は 40 都道府県 871 施設 2,876 名、年間の研修会開催数は 2 回が 15 都道府県、3 回 13 都道府県、毎月開催は 1 都道府県であった。新型コロナウイルス感染拡大後に研修会を中止したのは30都道府県であった。今後は感染予防策をとったうえで対面開催 18 都道府県、オンライン開催 14 都道府県であった。コロナ禍における院内Coとの関係性の変化は、あっせん時の対応よりも日常的な対応の方が大きかった。研修会開催数の減少、研修のスタイルの変更、コロナ禍による都道府県コーディネーターによる病院訪問の減少などから、今後長期的に見て影響が出ることが考えられた。

D. 考察

授業実践を通し、普段触れる機会が少ない倫理的ジレンマの話題について考え、自らの考えと他者の考えを共有する時間を持ち、活発な意見交換が行えた。意見共有は、生徒にとっては有意義であったことはフィードバックからも明らかである。移植医療は、意見が分かれる題材であるため、正しい知識の修得の上に自分の意見の形成をし、他者と意見共有をすることでさらなる私見の醸成につながるといえる。生徒が様々な価値観を知り、課題解決能力につながるような移植医療の教育実践が今後重要であると考えられた。初等教育においても移植医療を題材にした授業が実践されていることから、その取組を調べ、まとめて、世に広げることで、他校の参考になると思われる。

院内Coに対する研修を含む臓器提供体制整備は、コロナ禍の影響を受けていた。長期的にみると、院内Coと都道府県Coのコミュニケーションへの影響も危惧された。コロナ禍における研修スタイルの変更がより良い研修のあり方につながった都道府県もあったことから、従来のスタイルを見直すきっかけとする可能性が示唆された。

E. 結論

生徒の思考を重視する授業実践として、今回は移植医療の中でも倫理的ジレンマの１つである「匿名の原則」を題材にした。生徒は過去の学習内容と合わせて考え、自分の意見をまとめ、他者の意見を聞くことで当事者の立場になり、思考をより深めることができた。移植医療に関する知識伝達の授業だけでなく、倫理的ジレンマを考える授業を実践することの有用性が示唆された。今後は、授業案をもとに際に授業を行い、生徒の反応を調べ、授業案の改訂並びに横展開を検討する必要がある。

初等教育において移植医療を題材にした授業実践を参観した。当事者の体験談や臓器移植に関する基礎知識について学んだあと、双方向かつ参加型の授業が実践されていた。生徒が様々な価値観を知り、課題解決能力につながるような移植医療の教育実践が今後重要であると考えられた。

コロナ禍における院内Coとの関係性の変化は、あっせん時の対応よりも日常的な対応の方が大きかった。研修会開催数の減少、研修のスタイルの変更、コロナ禍による都道府県コーディネーターによる病院訪問の減少などから、今後長期的に見て影響が出ることが考えられた。

F. 研究発表

1.　論文発表

・佐藤毅.21世紀心の時代に　いのちの授業　臓器移植.道徳ジャーナル2020;105:1-3.
・佐藤毅.高等学校の保健体育科における授業.小児版臓器移植ハンドブック.94-96.
・Tomoko Asai ,Yasuhiro Taniguchi,Yukiyoshi Tsukata: Individual readiness for transplantation medicine of laypersons and the number of deceased organ donors: a cross sectional online survey in Japan, South Korea and Taiwan.BMJ Open 12:e048735. doi:10.1136/bmjopen-2021-048735.
・石橋ひろ子,朝居朋子,久納智子：患者の同性パートナーと患者と疎遠な家族等の脳死下臓器提供の意思決定における院内移植コーディネーターによる総意形成支援.家族看護学研究.27(2).1-12.
・朝居朋子.臓器提供に係るスタッフの動きと役割-A Day in the Life.救急医学.45(10).1255-1262.
・加藤櫻子,朝居朋子,剣持敬,纐纈一枝,宮島由佳,

吉川充史,明石優美: 大学病院の国際化に伴う外国人を対象とした臓器・組織提供体制の検討.日本臨床腎移植学会雑誌.9(1).134-136.

2. 学会発表

・朝居朋子,田中秀治,三宅康史,横田裕行:臓器・組織提供を希望する家族の意思決定支援.第 56 回日本移植学会総会.2020 年 11 月.移植 2020;55:222.

・佐藤毅.第 4 回学んで救えるこどもの命 PH Japan プロジェクト遠隔配信シリーズセミナー. 日本小児循環器学会.2020 年 11 月

・佐藤毅.「包括的ないのちの授業の必要性」～生老病死から考える～.第124回日本小児科学会学術集会.2021.4.17.日本小児科学会雑誌.125(2).143.

・朝居朋子,横田裕行:新型コロナウイルス感染拡大の中での院内コーディネーター研修の実施状況等に関する調査.第57回日本移植学会総会.2021.9.19.日本移植学会総会プログラム抄録集.56(online).

・朝居朋子,伊藤美保.「やさしい日本語」医療系学生向けプログラムの開発と実践.第5回日本ヒューマンヘルスケア学会.オンライン.2022年9月

・朝居朋子,佐藤毅.臓器移植における倫理的ジレンマを題材にした授業実践報告.第57回日本移植学会総会.名古屋.2022年10月

・杉元弥生,朝居朋子,明石優美,剣持敬.レシピエント移植コーディネーターが抱える役割遂行上の困難に関する調査研究.第57回日本移植学会総会.名古屋.2022年10月

・長谷川綾子,朝居朋子,田崎あゆみ,中村小百合.脳死下臓器提供事例経験が病棟看護師の負担感に与える影響.第57回日本移植学会総会.名古屋.2022年10月

・明石優美,朝居朋子,剣持敬.移植看護学創生～実践から,学問へ～臨床の現場から移植コーディネーション学へ 大学院教育の意義.第57回日本移植学会総会.名古屋.2022年10月

・朝居朋子,市野直浩,小林正尚,前田圭介,渡哲郎,長谷陽太,松岡透,堀場文彰,古澤彰浩,西井一宏,中村小百合,三吉友美子,大槻眞嗣.本学の専門職連携教育としてのアセンブリ教育における段階的・系統的な評価方法の構築に向けた取り組み.第15回日本保健医療福祉連携教育学会学術集会.オンライン.2022年11月

G. 知的所有権の取得状況

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3.その他

なし